

恋の枢

坂西真弓

炎のうちにどんな秘儀があるというのか

辨合の壁画と古代神の立像とが

高窓の鏝戸から洩れる 紫色の

光の箭を浴びながら

黄金の巨きな卵に呑み込まれる

肩まで垂らした艶やかな捲毛が

胸の双丘を蔽うと

老女は生涯の枝脈を遡る

そのひと滴の中には 邪悪な舌をもつ

火蜥蜴の王国が匿されている

没薬に誑かされた息子らは

閉じられた芯になかも嫉液を注いでゆく

破局は来た

それはなんとという紅蓮の効果だろう

神の手

その色彩を愛するものにとって

深い夜は幸福である

天文台の円天井は四大に囲繞され

アルタミラの洞窟は

母の袋のように發水にあふれ

蕙楼には黒燐石でできた大鳥が向かう

だがなんと掌の裏に天球は

真夏の毒に熟れた天球は

肉と銅とを秘めた剣のように

宿命の悲恋を祝いでいる

識神は

夢の筒なる旅路へと

生贄たちを導いてゆくのだらうか

あの澄明な空を逝く満艦飾の星々のように